

○爆笑したり、目頭が熱くなったり、そ

して、思わず絶句したりと、非常に和やかで、真摯な懇談であったが、それは明らかに蓼高生4人の「聴く姿勢」によるところが大きい。立科小学校の伴野健校長先生が、本年度の入学式における学校長式辞で、第一に、「気持ちと体を話す人にしっかり向けて聴くこと」を挙げられたように、「聴くこと」は学習活動及び人間関係の基本である。人の話を聴けない大人が少なくない昨今、4人の高校生の「聴く姿勢」、すなわち、訥々とした老生の話やお互いの発言に真剣に耳を傾け、うなずいたり、相づちを打ったり、受け止めた話の内容を自分の言葉で簡潔に話し手に返したり、さらに、自分の考えや経験を誠実に語ったりする姿に、嬉しい驚きを覚えた。

○合唱練習のとき、凜とした声で注意したB生が、「普段大きな声で話しているのに、その声が出ていないことがとても残念だったので、つい注意してしまった。注意した後、A先生から『注意の仕方が悪い。』と怒られないか、心配していた。」と話し、一同、大爆笑した。A先生は、「B生を叱るつもりはまったくなかった。むしろしっかり歌ってほしいという気持ちに突き動かされた行為であり、よく注意してくれたと

嬉しかった。生徒会役員が、一生懸命取り組んでいたからこそその注意と思う。」と語ったが、高校生と教師の信頼感は、このようなさりげない言葉の中に宿っているのではないかと感じた。

○（人は誰も、人間であるが故の弱さや醜さ、狡さなどを持っているのではないかと。多くの人が、それを「恥」と考え、心の奥底に必死に抑え込んでいるが、懇談前、このような醜悪な部分を剥き出しにする大人の姿がメディアを賑わせていた。「会見で号泣した兵庫県県の県会議員」はその代表であろう。）この県議について、「大人なのに、恥ずかしい。泣くなよ、と言いたい。」（B生）、「確かに情けないと思うが、あの県議なりの精一杯の謝罪だったのではないかと。ああするしかなかったのではないかと。（C生）、「テレビをあまり見ないので、ちょっとしか見なかったけど、いい歳をして情けないと思いた。（D生）、「本当のところは分からないが、自分は『嘘泣き』だと思わないに泣くときは声が詰まって、あんなに話すことはできないし、涙が目の外側（目尻）から出ていたからだ。誠実さのかけらもない涙だった。真実の涙は、目頭から出る。」（E生）と語った。4人それぞれの意見に共感を覚え、特に「嘘泣き説」には感服した。



変な時代」である今日、親も教師も大変だが、それ以上に高校生（子ども）自身が大変なのだと感じた。

○情報化社会の只中で、やはりケータイやスマホなどへの高校生の依存度は高い。「ライン・トラブル」が連日のように報じられているが、デジタル音痴の身は、高校生諸君が、電子映像メディアの「功」と「罪」を十分理解したうえで、「罪」に巻き込まれず、「功」を効果的に活用してほしいと願うばかりである。

セウォル号の船長や都議のセクハラ発言にも話題が及んだが、大人の姿をじつと見つめ、その背後にある暗い部分を鋭く見抜いている高校生の純粹な目を頼もしく感じた。そして、A先生の、「大人はつい斜めから、疑いの目で物事を見てしまうが、生徒の純粹な分析に正直驚いた。その純粹さをこれからも簡単に手放すな、と願う。」という言葉に、心の中で拍手喝采した。

○長い入院生活や両親の別居、親への反発・不満、大人に対する不信任感、混乱の度を増す大人社会への苛立ち、将来の不安など、明るく、屈託のない表情や態度からはうかがい知ることのできない大変さを高校生は背負っている。懇談を通して、大人の愚かな我欲や醜い保身が築いてしまった「子育ての大

8月30日、蓼科高校の第45回「ポップラ祭」のトークショー「3・11を忘れない」を參觀しました。そして、東日本大震災の被災地支援について、熱心に語り合い、聴き合う蓼高生を目の当たりにして、金原校長先生の、「地域の方々から信頼される蓼科高校生になる」という願いが、確実に実現しつつあることをつぶさに感じました。

「ポップラ祭」の帰路、車を運転しながら、ふと、「その純粹さを簡単に手放すな。」というA先生の言葉を思い出し、高校生（中学生・小学生・乳幼児）よりも、我欲と保身に汲み及ぼしている身勝手な大人こそ、たとえ遅きに失していてもこのメッセージを謙虚に傾聴しなければならぬ、と自戒したことです。